



羅針盤

塩原 哲夫
Tetsuo Shiohara

杏林大学医学部名誉教授,
Visual Dermatology 編集委員



本音で語ってこそ楽しい

人が顔を合わせて自分の考えをぶつけ合う機会は近年めっきり減少した。お互いを傷つけないようにという配慮が強すぎて、顔を合わせると差し障りのない会話に終始することの多くなった昨今である。筆者が企画した本誌のディベート欄も誌上での討論としたせいか、食い違いばかりが目立ち、必ずしも当初のもくろみ通りにはなっていない。自分の考えを発信する手段としてのインターネットの普及は、その匿名性と顔を合わせないで済む反動ゆえに、余りに過激な発言が繰り返され、結果として勝者と敗者しか残らない。しかし違う意見を持っているからこそ、顔を合わせて語り合う事で、双方向性の意見交換が予想もしない有機的な化学反応をおこすのではないだろうか。

この端的な例が本特集号のアトピー性皮膚炎患者のお風呂に関するディベート (p. 134 ~) である。始め、勢い込んで今山説 (アトピー患者はお風呂に入らない方がよい) に対する反論をしていた江藤先生が、今山先生の柳に風の対応に次第に軟化し、終いには今山説に荷担してしまうという展開は、この座談会を仕掛けた筆者ですらまったく予想もしないものであった。しかし、これこそがディベートの醍醐味なのである。

今から 40 年程前、世の中はこのような歯に衣着せぬ議論であふれていた。学会で発表すれば、年長者から「勉強し直してこい」「そんなつまらない研究は止めてしまえ」などといった容赦ない言葉をわれわれは浴びせかけられ続けた。しかしそれに慣れてしまえばどうという事

もなく、それをやり返す術も身につけるといい良い面もあったのである。

本特集号で紹介したのは、学会や論文などではなかなか本音で話せないテーマに関する本音トークである。学会などではなかなか本音を語らない先生方も、編集委員の巧みな誘導によって、ついつい本音を吐露してしまう場面もかなり見られる。その結果、学会や論文などでは絶対出てこないような話が續出し、読み物としても面白いものになったのではないかと自負している。本音を話して頂くため、「昔風のツッコミ」もあえて入れている。その結果、読者の方はどちらの本音に共感するか、反論するかを選択して読んで頂くと、より面白く読めるのではないかと考えている。

筆者は本特集号の討論の 4 つに参加したが、いずれも誌面上はかなり白熱したやり取りのように見えるかもしれない。なぜなら、当日の雰囲気や再現するため、普通ならカットすべき発言も極力残したからである。しかし、実際はかなりリラックスした雰囲気に終始し、時間の経つのも忘れるほどであった。討論が終わった後、今山先生、江藤先生と駅のホームでサヨナラと言ったときに感じた一抹の寂しさは、久々に感じた安堵感と充実感の反映だったかもしれない。すっかり本音でぶつかり合うことを忘れてしまった若い世代に、本音で語り合うことの素晴らしさに目覚めさせるきっかけになればと願っている。